

米国大学院学生会

ニュースレター かけはし

2011年6月号

メンタープログラム報告

米国大学院学生会の目玉の活動の一つである『Mentor Program』は、学位留学経験者の知識、ノウハウ等を学位留学希望者に提供し、出願手続きをできるかぎりサポートする目的で開始されました。昨年の9月17日より開始された第一回メンタープログラムでは、40名のメンターに登録していただき、本年度出願を目指す14名の学位留学希望者に対し、メンターをマッチングし、サポートをしていただきました。本プログラムはボランティアであるメンターによって支えられておりますが、初年度からこれほど多くの方にメンターを志願していただき、幹事一同大変感謝しております。

さて開始より9ヶ月を経て、無事出願を終えた方もおり、プログラムとして一つの節目を迎えております。メンタープログラムを通してオハイオ州立大学、カリフォルニア大学バークレー校、スタンフォード大学、ハーバード大学、プリンストン大学、マサチューセッツ工科大学、ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン等多くの大学院に RA, TAもしくは奨学金付きで合格されています。合格された方には、心からお祝い申し上げる同時に、9月よりみなさんの新天地でのご活躍をお祈りしています。

来年度の実施に向け、先月マッチングが完了したメンター及び学位留学希望者に対しアンケートを行いました。学位留学希望者の満足度は、5段階評価で平均4.7と大変多くの方に満足していただいたようで、こちらも大変嬉しく思います。一方で、ウェブのインターフェースの使いやすさ、マッチング期間等に関し、色々なアドバイスを頂きました。次回の実施（7月下旬予定）に向け、改善点を見直し、よりよいメンタープログラムを目指し、これからもみなさんのご期待に添えるよう幹事一同頑張ってまいりたいと思います。

2011年7-8月 全国5大学で海外大学院留学説明会を開催します！

◆東京理科大学 神楽坂校舎&野田校舎

日時： 2011年7月2日（土） 午前10時30分～午後12時30分（神楽坂校舎）、
午後3時30分～午後5時30分（野田校舎）

会場： 神楽坂校舎 8号館853教室、 野田校舎 K103教室

主催： 理科大教員有志、米国大学院学生会

後援： 船井情報科学振興財団、アメリカ大使館

◆北海道大学

日時： 2011年7月5日（火） 午後6時10分～午後8時00分

会場： 北海道大学 国際本部2階大講義室

主催： 北海道大学国際本部、米国大学院学生会

後援： 船井情報科学振興財団、アメリカ大使館

◆東京工業大学 大岡山キャンパス

日時： 2011年7月9日（土） 午後5時～午後7時30分

会場： 東京工業大学 大岡山キャンパス 南2号館 S222講義室

主催： 米国大学院学生会

後援： 船井情報科学振興財団、アメリカ大使館、東京工業大学留学生センター、STeLA

◆東京大学 本郷キャンパス

日時： 2011年7月30日（土） 午前10時～午後1時（終了後、懇親会あり）

会場： 東京大学 本郷キャンパス 工学部2号館213大教室

主催： UT-OSAC 共催：米国大学院学生会

後援： 東京大学工学部国際交流室・国際本部・卒業生室、船井情報科学振興財団、アメリカ大使館

事前登録： [UT-OSACのホームページ](#)

◆九州大学 箱崎キャンパス

日時： 2011年8月1日（月） 午後3時～午後5時

会場： 九州大学 箱崎キャンパス 国際ホール

主催： 米国大学院学生会

後援： 九州大学留学生課、船井情報科学振興財団、アメリカ大使館

目次

メンタープログラム報告	1
留学説明会のご案内	1
F-1ビザ、J-1ビザの取得に関して (丹 恵)	2 3
寄稿： なぜ、留学しなければならないのか？ (坂本 啓)	3 4
学科紹介： University of Washington (吉良 信一郎)	5 6
わが街紹介： アーバナ・シャンペーン (持主 弓子)	6 7
お薦め本： 『若き数学者のアメリカ』 (若森 直樹)	8

5月18日、ニューヨーク大学ではヤンキースタジアムで卒業式がありました。今回の主賓はクリントン元大統領で、これから社会に出て行く卒業生に対して、「学んだことを活かし、やりたいことを思いっきりやってください。しかし、限りある地球の資源と環境へ対しての責任感をわすれず、子供や孫に残したい社会をつくるひとになってください。」と相変わらずのわかりやすく、説得力のある祝辞をくださいました。生徒が卒業して行くのは寂しい反面とてもうれしくなります。生徒の家族にも会うことができる貴重な機会です。

さて、前はアメリカの留学生のビザをおはなししましたので、今回はビザに必要なI-20やDS2019を大学に発行してもらった後の第2のステップ、アメリカ大使館や領事館での学生ビザ取得について気をつけるべきことについておはなしします。短期の商用や観光で入国する場合とは異なり、渡航目的が留学の場合、ビザをアメリカ大使館（東京）アメリカ領事館（大阪、那覇、札幌、福岡）で申請しなければなりません。ビザ手続きは大きく分けて3つのステップがあります。まず第一に、ビザ申請書類の準備、第二に申請料金の支払い、最後にアメリカ領事との面接があります。申請書類の準備についてはアメリカ大使館のサイトに日本語でもかなり詳しく、書かれているのでよく読んで参考にしてください。特筆したいのはFビザとJビザの補足書類として上げられている、成績証明書と科学技術関連プログラムです。

成績証明書： ビザ申請日から遡って過去5年間に米国留学の経験がある方は、留学していた期間の成績証明書を米国の学校から入手してください。米国留学の経験がない場合は、最近3年分の成績証明書を日本あるいは米国以外の学校から入手し提出してください。

科学技術関連プログラム： 科学技術関連プログラムに出席する方は、完全な履歴書、すべての出版物のリスト（該当者）、学校からの許可通知・手紙の提出が必要です。

成績証明書はビザを申請している学生が、まじめな生徒かどうかをみる基準に使われます。例えば留学経験があるが卒業はしてなかったり、成績がすごく悪かったりすると面接のとき説明を求められるかもしれません。あらかじめ納得してもらえよう理由を準備しておくといいと思います。また、科学技術関連プログラムについての補足書類をなぜ提出しなければならないのかははっきり説明されてないのですが、専攻の分野がアメリカの国務機密や軍事機密に携わる場合、厳しく審査される傾向があります。去年、私の大学で中東出身の男性の大学院生が核化学・核エンジニア学部を専攻すべく、ビザの申請を早めにしたのですが、何ヶ月もの審査の結果、結局ビザは許可されませんでした。専攻の学部と出身地によって、審査に時間がかかる可能性があります。上記の書類はすべて英文での提出になりますので、履歴書や成績証明書が日本語の場合、翻訳するのを忘れずに。

必要な書類をそろえ、料金の支払いが済んだら、最後はアメリカ領事との面接です。面接は予約制ですが、夏は9月入学の留学生がビザの申請をするので予約は混み合います。できるだけ早めに面接予約することをお勧めします。F-1とJ-1のビザの申請にはI-20やDS2019の提出が必ず必要です。ただし、東京または札幌で申請を予定されてる方で大学の授業の開始日まで1ヶ月切っても、それらの書類が大学から届いてない場合は、面接を先に受け、I-20やDS2019を面接後に郵送してもかまわないと大使館のサイトに書いてあります。私は今まで知りませんでしたが、なかなか寛容ですね。領事との面接は、面接とはいっても窓口で立ったまま質問に答えるというかたちです。大使館のサイトにはわかりやすい、ビザ面接当日のプロセスのビデオ案内までありますので参考にしてください（リンク下記）。

学生ビザの場合に質問される一般的な質問は、どの大学でどんな科目を勉強するのか、卒業後は何をするのかということです。I-20やDS2019を領事に渡してからの質問なので、大学名、科目、また卒業予定の日程（I-20やDS2019に明記してあります。）は覚えておくべきでしょう。卒業後の予定を聞かれたら、それはちょっとだけひっかけ問題です。なぜかというと、米国移民法は、領事に「全ての申請者は米国に移民する意志がある」という仮定に基づき審査をするよう求めているからです。学生ビザは非移民ビザとされ、移民する意志があると思われる申請者には許可されません。領事のほうでもアメリカ人になりたいんじゃないかという視点から審査されてるた

め、むしろ移民する気はまったくありませんという気持ちを誇示するべきです。「卒業したら、速やかに日本に帰国して、アメリカで学んだことを活かしながら日本のその分野の発展に貢献したい。」というのが模範の返答です。日本人はアメリカに移民する人の数が比較的すくないので、移民する意志があると見られてビザが却下されるケースは少ないと思います。でも卒業後の予定を聞かれて、「彼がアメリカ人なので結婚するかも」とか、アメリカを褒めるつもりで、「アメリカはチャンスの多い国なので将来アメリカで働きたい」などと発言してしまうと、それが正直な卒業後の予定だったとしても移民の意志有りということでビザを却下される可能性が大きいと思います。ご注意ください。ビザを発行してもらったら、授業開始日の30日前からアメリカに入学することができます。I-20やDS2019を手荷物のかばんに入れて、入国審査のとき、パスポート、入国カード(I-94)と一緒に入国管理官に提出してください。

資料：

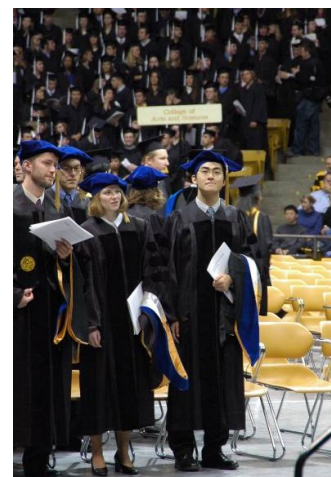
<http://www.nyu.edu/life/student-life/international-students-and-scholars.html> (Office of International Students and Scholars, New York University)

<http://japanese.japan.usembassy.gov/j/visa/tvisaj-niv-procedures.html> (The American Embassy of Japan)

寄稿：なぜ、留学しなければならないのか？ Univ. of Colorado at Boulder 修了 坂本 啓

<はじめに>

米国大学院学生会（以降、学生会）の幹事になって、これまで何度か留学説明会に立ち会ってきた。どの会場もすごい熱気で、たくさんの学生が留学に興味を持っていることに驚く。参加者のなかには、学位留学をなかば決意していて、自分の留学準備の参考とするために、経験者の話を聞きに来てくれている人もいる。一方でほとんどの参加者は、会場で話を聞きながら、自分に学位留学が必要なのかを（もしかしら初めて真剣に）考えている様子だ。学生会としては、前者の人たちの支援ももちろん重要だが、加えて後者のグループの人たちに、留学の魅力をうまく伝えられたらと思う。その一つの方法として本稿では、私自身が学位留学を目指すにあたって検討したことと、留学後の評価を整理してみたい。昨今の社会情勢の急激な変化を考えると、いま多くの学生がじっくりと検討をすれば、実は自分たちの夢を実現するためには「どうしても留学しなければならない」という結論に至るのではないかと私は思っている。



コロラド大学での学位授与式（2004年）

<要求と制約を明確にする>

留学前、私はある先生に促されて、「将来、自分が希望する形で活躍するためには、どんな能力・経験を持っている必要があるか」を考えてみた。専門知識、議論する力、異分野への理解力、創造力、問題発見能力、リーダーシップ、人脈、等ほどの程度必要だろうか。次に、それらの能力や経験はどこに行けば身につくだろうか。日本あるいは米国の大学院に進むか、それとも企業で訓練を積むか、ベンチャーを起こすか。さまざまな可能性を考慮した。その際、どうしても考慮しなければならなかったのは、金銭的な制約だった（多くの人がそうだろう）。上記の要求を満たす具体的な方法を、自分が手に入れられるリソース（時間・お金）の制約の中で組み立てる必要があった。

また、「社会で活躍する」ためには、「社会（例えば自分が活躍したいと思う分野）が求める能力が何か」を考えることが重要だ、と複数の大人が諭してくれた。現在の日本社会を見れば、世界における日本の経済的地位は低下を続け、多方面で産業構造の転換が図られている[1]。「グローバル人材」という言葉が象徴するように、企業が求める人材像も大きく変化しつつある。研究の分野では、欧米の研究を日本に持ち込む「本邦初公開」だけで論文が書けた時代はとうに過ぎ、いまや世界が平坦化して競争・協力をしている。ましてや20年後、30年後には、この傾向は一層進行しているだろう。こうした中で活躍するための能力というのはどういうものだろうか。…いまから考えると、上述のようなことを留学前に考え、情報を集め、面白そうな大人たちを捕まえて話しに行った、そのこと自体がとても貴重な経験だった。

参考文献[1]：経済産業省「日本の産業を巡る現状と課題」2010

<http://www.meti.go.jp/committee/materials2/downloadfiles/g100225a06j.pdf>

寄稿：なぜ、留学しなければならないのか？（続き）

<米国大学院の利点>

結局私は米国の大学院 (Univ. of Colorado at Boulder) へ進学してPh. D. を取得したのだが、留学前にうだうだと考えていた以上に、米国の大学院で得たことは多かった。特に以下の6点について、大学院留学の利点としてある程度は予測していたのだが、結果は予想以上だった。

1. 米国の大学院は、極めて質の高い講義を提供している。講義についていくのは大変だったが、自分の研究分野以外にも含む広い専門知識が体系的に学べ、様々なバックグラウンドを持つ教員・学生と議論する経験が得られた。
2. 優れた研究環境があった。設備も良かったが、それ以上に教員の質が高く、また集まっている学生も皆モチベーションが高いので、彼らとの議論を通して自分の知識・思考力を引き上げてもらえた。議論を推奨する文化があるのも素晴らしい。米国の大学は、モノよりむしろ「人」に投資していると感じた。
3. 米国人だけではなく、様々な国から来た学生・研究者たちと一緒に仕事をする中で、異文化の中でも仕事ができる自信がついた。相手の文化的背景をある程度察してコミュニケーションが取れるようになったと思う。それは、自分自身が米国でマイノリティーとして差別を受けることがあり、そこで食いや下った経験から得た技能に他ならないと思う。
4. 英語で論文を書く、発表する、議論をすることが容易になり、扱える情報が一気に増えた。
5. 世界に広がる知り合いのネットワークができた。現在では国際会議に行けば、同窓の研究者たちと飲みに行くし、友人が米国だけではなく様々な国で活躍を始めている。そしてそれ以上に、留学先で出会った日本人たちとの強固なネットワークができたことが素晴らしい。自分と同じような問題意識を持って日本から飛び出した元気な人たちと仲間であられることは、本当に幸せである。
6. 最後に、以上のすべてを、学費免除で、さらに生活に十分な（わずかに貯金もできる）月々の給料を受け取りながら享受できた。給料をもらうことで、自分は研究のプロフェッショナルである、というプライドとプレッシャーを持ちながら学生生活が過ごせた。また米国の大学は一般に、研究の支援体制やレクリエーション施設がたいへん充実しており、容易に文献が探せる図書館と、気軽に運動ができるジムは、（学費を払っていないにも関わらず）学生証を持っている利点を活かして大いに利用させてもらった。

上記6点は私個人の経験に基づくものなので、自分たちに要求される能力・経験がどこで得られるかを各自で検討するとき、ぜひ複数の留学経験者と話す機会を作って意見を相対化してもらいたい。学生会の留学説明会は、それを可能にする場である。もちろん留学経験者だけではなく、多様なバックグラウンドを持つたくさんの人たちとあらゆる機会です話ることが、広い視野を獲得することにつながるに違いない。

<おわりに>

私の場合は、進路に悩んでいるときに多様な情報・意見に触れる中で、自分に適した一つの道筋が見えたように思う。人によって将来への要求や、持っている制約条件は違うから、学位留学が万人にとって適切な道であるわけではない。それでも、単にメディアに情報があまり登場しないとか、周囲に留学した知り合いがいないというだけの理由で、留学の可能性を十分に検討しないのは、とてももったいないと思う。広く情報を集めて検討をすれば、各自の中に「留学をしなければならない」理由を見出す人は、きっと多いはずだ。今後も学生会の活動を通じて多くの学生に対し、進路選択の参考にできる情報を発信していきたい。



サンディエゴにて（1998年・一番右が著者）

寄稿者：坂本 啓（さかもと ひらく）

米国大学院学生会 幹事 / 東京工業大学 機械宇宙システム専攻 助教

東京大学工学部に在籍時の1997年、Univ. of California at San Diegoに1年間交換留学。東大で修士号取得後、Univ. of Colorado at Boulder (CU)へ編入し、2004年にPh. D. 取得(Aerospace Engineering Sciences)。日本学術振興会(JSPS)・海外特別研究員としてCUおよびMITにそれぞれ1年間滞在。MITでは国際宇宙ステーションにおける実験に参加。JSPS特別研究員PDとして日本大学に滞在后、2008年より現職。専門は宇宙構造物の動解析。<http://www.mech.titech.ac.jp/~dosekkei/sakamoto/>

初めまして。University of Washington(以下UW)において神経科学の博士課程3年目に在籍しております吉良信一郎と申します。この度は、UWの大学全般について、私の所属する神経科学プログラムについて、そして現地生活の様子についてご紹介させていただきたいと思っております。

<大学の紹介>

まずUWは米国シアトルにあり、ワシントン州の州立大学なので、この名がついています。もう一つミズーリ州セントルイスにWashington Universityという私立の大学があり、日本語でワシントン大学という場合に、よく混同されることがあります。私が紹介するのはシアトルのUWですので、お間違えのないようご注意ください。UWの学生数は学部生約3万人、大学院生約1万人という大規模な大学です。ワシントン州内の学生はもちろん、米国北西部では最もメジャーな大学なので、周辺の州からも学生が集まってきます。シアトルという街はコンピューターソフトウェア大手のマイクロソフト社と航空機製造で有名なボーイング社の存在が大きく、これらの企業が大学に対しても投資や人材育成を行っているため、UWのコンピューターサイエンス及び工学は全米でも高いレベルにあります。神経科学は分野が広いですが、私の研究分野であるシステム神経生理学に関して言えば、とても恵まれた環境にあると思っています。

<神経科学プログラム>

私は神経科学(Neuroscience)を専攻しており、Neurobiology and Behavior Programという名の大学院神経科学プログラムに所属しています。UWの神経科学プログラムはいくつもの学部を包括しており、各学部で神経科学に関連した仕事をしている研究室は神経科学プログラムに属しています。神経科学は学際的な分野なので、多くの米国大学院において神経科学プログラムではこの形式がとられているようです。現在プログラムには約130人の教授・助教授、約50人の学生がいます。

<神経科学プログラムの入学から卒業まで>

神経科学プログラムに入ると、1年目は授業を受けつつ、学生の興味ある研究室を3ヶ月ごとに3つローテーションします。この際、プログラムが学部を包括しているので、学部の括りにとらわれることなく大学内で自分の興味ある研究室を自由に選ぶことができ、学生にとって選択の幅が広がるメリットがあります。各ローテーションの終わりには教授および学生たちの前でプレゼンテーションを行い、次のローテーション先に移ります。1年目の終わりに所属先の研究室を決めることになり、ローテーション中の感触や、研究室の資金・スペースといった受け入れ状況をもとに各々決定します。2年目に入るとだいぶ研究に集中する環境が整いますが、それでもTeaching Assistantの義務があったり、学位論文研究に取りかかる前に資格審査試験(Qualifying Exam)を受けなければならなかったりします。ですから、全神経を研究に集中できるのはやはり3年目になってからと言えます。その後はどのような研究テーマを選ぶかにもよりますが、多くの学生は5~6年で博士号を取得します。UWの神経科学プログラムは面倒見がよく、自らドロップアウトしない限りはほぼ全員博士号を取得して卒業していきます。

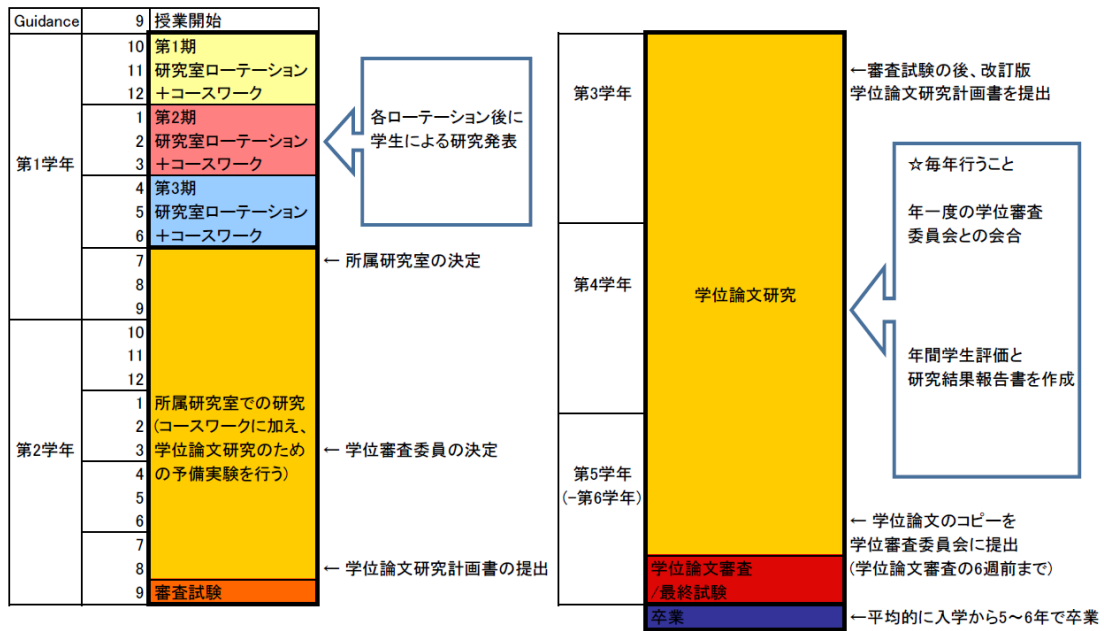
<シアトル生活>

シアトルという街はそれほど大きくありませんが、適度に娯楽や自然を楽しむことができる住み良いところです。雨が多い街として知られる一方、夏には青空が広がりとても気持ちのよい日が続きます。ワシントン州全体では白人の占める割合が高いものの、シアトルには多種多様な人種がおり、特にアジア人が多いので日本人にとっては居心地のよい環境だと思います。アジア系大型スーパーや日本の雑貨店などもあり、自宅では日本とほぼ変わらない生活を送ることも可能です。また、スターバックスやタリーズの発祥地でもあるように、人々のコーヒーに対する愛着はとても強いです。メインストリートでは、ワンブロックに一つはカフェがあり、どこも賑わっています。また、日本人にとってはマリナーズ戦でイチローの活躍を応援しに行くのも大きな楽しみです。



4月、桜の咲き誇るキャンパス

以上、簡単ではありますが大学紹介とさせていただきます。さらに詳しい情報をお求めの方は私宛にshinkira@uw.eduへご連絡ください。より多くの方々にUWへ関心を寄せていただければ幸いです。



わが街紹介：アーバナ・シャンペーン

Univ. of Illinois, Urbana Champaign 持主 弓子



写真1：街にある古い年代物の建物

<アーバナ・シャンペーンについて>

イリノイ大学はシカゴから南に約230キロ下ったところにあるアーバナという街とシャンペーンという街にあります。アーバナとシャンペーンはツインシティでぴったりとまるで1つの街のようについています。イリノイ大学はこの2つの街をまたがる形で存在していますので、同じキャンパス内でも住所がアーバナだったり、シャンペーンだったりします。例えば、私は大学院生用のオンキャンパスの寮に住んでいるのですが、寮はアーバナで、通っている学部の校舎はシャンペーンにあります。アーバナとシャンペーンの人口は合わせて約11万人程度で、そのうちの半分が大学関係者（学生、教職員、その他スタッフ）ですので、まさに大学の街といえるところです。

<街の様子>

街をちょっとでるとコーン畑しかないというのんびりとしたところです。街には小さな映画館があったり、となり街のサヴォイ（キャンパスから車で10分程度です）にはカラオケボックスがあったりしますが、基本的には大学が中心の街ですので、あまり若者が遊べるスポットはありません（車を使えば約2時間半でシカゴに行くことができるので、遊ぶ時はシカゴに行くという学生が多いです）。街には写真1のような古い年代物の建物が数多くあり、田舎街ですがとても素敵な雰囲気です。住民にはアジア人、アジア系アメリカ人も多く、キャンパス近くを歩いている限りではアジア人またはアジア系と出会うことの方が多いい気がします。治安は大学が力をいれていることもあり、とても良いです。しかし、Crime Alert という大学側からの警告メールが2か月に1度くらいは届きますので（多くは夜中にキャンパスの外で強盗にあった等）、夜の一人歩きは避けるなどの注意は必要です。



写真2：大学院生の寮

<大学> イリノイ大学は18の学部を持つ総合大学のため、キャンパスは超巨大です。全米でもここまで大きなキャンパスは珍しいそうです。例えば、私の住んでいる大学院生の寮（写真2）はキャンパス内にありますが、ここから、学部の校舎まで徒歩で20分弱かかります。アメリカに来ると太る人が多いと聞きますが、私の場合、毎日かなり歩かされていたので、逆にかなり痩せました。15分おきだったり30分おきだったり、あまり便利ではないものの大学構内を公共のバスが走っていますので、移動にはこのバスを使うことも可能です。このバスはStudent ID Card（イリノイ大学ではi-cardと呼ばれます）を見せると乗車できます（学生は無料というわけではなく、授業料と一緒にバス代が徴収されているそうです）。大学はとてもきれいで、キャンパスの中心には広場やホテルがあります（写真3）。



写真3：キャンパスの中心

<生活> 私は大学院生用のオンキャンパスの寮に住んでいますが、日本人学生の多くはアパートを借りて住んでいるようです。アパートは値段や設備（例えばジム、プールつき等）、オンキャンパスまたはオフキャンパスなどで色々選択可能です（私は入学前に学部のアドミッションから、学部の学生がつくったアパート評価表のようなものが送られてきました。クラスメートの多くはそれをみてどのアパートにするかを決めたそうです）。ここは田舎街ですが、アジア系が多いため、アジア系の食べ物にはあまり不自由がありません。日本料理店も大学の構内に1軒、付近に2軒あります。味は・・・日本人が作っているわけではないので、正直、微妙です。が、一部の日本人学生には大学構内にあるSushi Sunというお店の牛丼が人気あります。日本の食材は、車がある人はシカゴのミツワ（アメリカで最大の日系スーパーマーケット）で買い物をしているようですが、キャンパスから徒歩でいける範囲にアジア食材店がありますので、基本的なもの（お米、お味噌、納豆などだけでなく、日本のインスタント食品やお菓子などもあります）は簡単に手に入ります。また、大学の農学部のMeat Science LaboratoryのMeat Sales Roomでは農学部が実習で生産した新鮮な卵を買えますので、卵かけご飯用にこの卵を買っている日本人学生もいるそうです（アメリカのスーパーで売っている卵は鮮度が悪く基本は生で食べることはできません）。田舎の街のため、やはり車があると便利です。が、車がなくてもキャンパス内に住んでいる限りは、キャンパスの近くのスーパーマーケットや飲食店、アジア食材店を利用できますので、とりあえずは生活に支障ありません。買い物も、街の北に大きなモールがあり、公共のバスにのってそこに行くことができます。

<気候> 東京よりもかなり北にあるのでかなり寒いことを覚悟してきたのですが、寒いというよりは内陸のため気温差が激しいという感じです。例えば今年2月初めに大きなストームがきて、そのときの気温は摂氏マイナス15度だったのですが、その2週間後に突然暖かい日が続く、そのときの気温は摂氏15度でした。ここに長く住んでいる人の話によると、中間があまりなく、低い気温と高い気温をいったりきたりすることです。個人的には、長く厳しい冬を想像してきていたので、雪が少なく、2月でも突然春のように暖かい日が続くこの気候はうれしい誤算でした。ただ、季節の変わり目は日によって気温差が大きいので、服装にも体調にも注意が必要です。特に4月や10月は夏のような日が続いたかと思うと、突然、暖房なしではいられないくらい寒くなったりもします。

<おすすめ> 大学が中心の街ですので、やはりお勧めは大学関係のものです。秋には、アメリカンフットボール、アイスホッケー、バスケットなど様々な試合があり、そのときには会場はオレンジと紺色で埋めつくされます（大学のカラーが、オレンジと紺色なので）。また、クラナートセンターというホールでは、有名なオーケストラの公演、海外のバレエやダンスの公演（今年は日本の花習塾の能の公演も予定されています）、大学の芸術学部の教授や生徒のコンサートやミュージカルなど様々に催されており、うれしいことに、学生は15ドル～20ドル程度でみるのが可能です。クラナートの中にあるカフェテリアでは、学期中の毎週木曜日には、小規模ですが無料のワインテイastingも催されているそうです。さらにキャンパスのちょうど真ん中くらいにあるアルトゲルドホールには、年代もののベルタワー（写真4）がついており、このベルタワーには平日のお昼に登ることが可能です。ここからの街の眺めは最高ですよ！またこの塔の管理人さん（キュートなおばあちゃんです）から年代もののチャイムのならし方のレクチャーも受けられます。たまにチャイムで日本の曲も弾いてくれますよ。

静かで治安が良く、日本の食べ物も比較的簡単に手に入るこの街は、留学先としてはとても良い環境だと思います。また、大学が経営している空港（University of Illinois Willard Airportといい、キャンパスから車で15分程度いったところにあります）から、シカゴやセントルイス、デトロイト、ダラスなどへ飛行機で行くことができます。この空港のおかげで日本への帰国やアメリカの他の都市への移動が本当に便利です。是非、留学先にイリノイ大学を考えてみてください。



写真4：アルトゲルドホール

ウェブサイト

<http://gakuiryugaku.net/>

【ニュースレター編集部】

小野 雅裕
原 健太郎
平林 正稔
工藤 朗
石原 圭祐
大勝 裕子
大久保 達夫

newsletter@gakuiryugaku.net

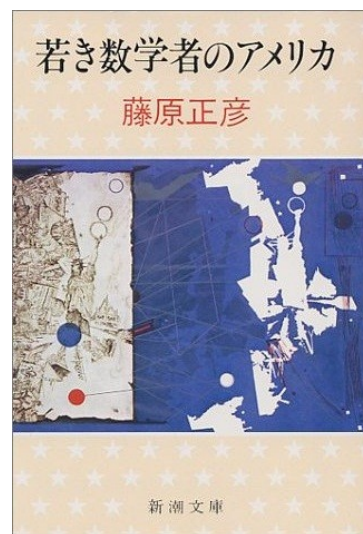
執筆者を募集中！

編集部では、留学体験記や各種のコラム(わが街紹介、学科紹介、お薦め本等)を執筆してくれる方を募集しています。

ご興味のある方・お問い合わせ等は、上記編集部までご連絡下さい。

お薦め本

『若き数学者のアメリカ』 藤原 正彦・著 (新潮文庫)



著者が、1972年にResearch Associate (研究員)として渡米し、その後コロラド大学のAssistant Professor となりデンバーへ移動しアメリカで奮闘したエピソードやその時々抱いたさまざまな感情を余すところなく赤裸々に綴った紀行文です。特に、著者の心理分析とその描写は秀逸で、英語が得意ではない日本人留学生が体験しがちな苦労話、研究上の悩み、自尊心や対抗意識等が非常に鮮明かつ正直に描いており、既に留学をしている人には共感できる部分が多いのではないかと思います。それと同時に、私の留学体験と照らし合わせると、留学して得ることができるモノや経験が時代や研究分野を超えた普遍性を持っていることに驚かされます。既に30年前に出版された本ですが、日本人留学生の中でもこれから博士課程への学位留学を志している人や、留学を終え自分なりのアメリカ留学観を確立した人に是非読んでもらいたい作品です。

若森 直樹 (ペンシルバニア大学 経済学部)

編集後記

・先日、日本に一時帰国する前にサンフランシスコに寄った際、この活動を通して知り合った人たちにもお会いすることができました。アメリカ各地にいる同じ志を持っている方々とお知り合いになることがこの活動の一番の醍醐味なのかもしれません。(原)

・現在、満天の旅行気分のなか、出張のためワシントンDCに滞在しています。先日はボストンに立ち寄って、学生会で出会った友人と会うこともできました。わが街と学科紹介を担当している私自身、大学や街、そして人々の違いを見つけるのはこの上ない楽しみの一つになっています！(平林)

・米国大学院学生会設立より間もなく一年が経とうとしています。このニュースレターも、様々な方に執筆して頂いたおかげで多様なアメリカ留学の姿をお伝え

できたのではないかと考えています。私自身は今月号で編集長としての役割を終える予定ですが、今年一年間ご愛読どうも有難うございました。今後ともニュースレターをよろしくお願いします(編集長・大久保)

【Facebookページ開設のお知らせ】

米国大学院学生会のFacebookページができました。
<http://www.facebook.com/gakuiryugaku>

留学生間・留学生と留学に興味がある学生の間での、交流や情報交換などを目的としています。こちらのページから「LIKE」「いいね」をクリックして頂くとWallに書き込みできるようになります！